

若手アカデミーの動向

STSフォーラム参加報告

岸村 顕広



2016年10月1日～4日、国立京都国際会館において開催された「科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム（STSフォーラム）」第13回年次総会に、若手アカデミー（国際分科会）を代表して参加する機会をいただいた。初日は全体の会合はなく、いくつかミーティングがあるのみであったが、私は Dialogue between Future Leaders and Nobel Laureatesに参加した。こちらは、総勢約100名の世界各国の未来を担う若手研究者たち（future leaders）が集まるもので、10グループ程度に分かれて自己紹介がてら交流をし、続いて各グループにノーベル賞受賞者を1名ずつ計2回迎え入れ、カジュアルな議論を行った。筆者のグループには中東、東南アジア、ヨーロッパ・北欧からの参加者が含まれ、研究分野・職種も多様であり、興味深い交流ができた。2名のノーベル賞受賞者（Peter Agre先生、Tim Hunt先生）からは、貴重な経験談に加え、現実には抱える問題に関してエンカレッジしてもらうことができた。

2日目からは本格的な会議がスタートし、本フォーラムの創始者で理事長の尾身幸次氏の開会の挨拶の後、安倍晋三首相のスピーチがあり、サイエンスとテクノロジーの発展に基づく新しいスマート社会「Society 5.0」に対する意気込みとともに、女性活用のさらなる推進についての決意が熱く語られた。その後、スロベニア首相、ロシアの副首相、榊原経団連会長などの来賓の方々から大きな方向性を示すスピーチがあり、それに呼応するような内容のPlenary session、Concurrent sessionが交互に行われる形で続いた。キーワードとして頻繁に現れたのは、ゲノム編集、IoT、スマート社会、AIなどであり、いずれもそれぞれの基盤となるサイエンスや技術が単独で暴走した場合に大きく社会が脅かされるものである一方で、社会の理解を得つつ、いかにして社会に還元するか、が非常に重要となるものであった。これらの議論はSTSならではと考えられ、実際に参加できたのは筆者にとって貴重な体験であった。また、筆者が参加したConcurrent sessionでは、セッションの内容によらず、結局のところ教育・人材育成が重要であり、適切なサイエンスコミュニケーションを促進していくことが必要不可欠、という結論が含まれることが多く、筆者自身、大学教員としての責任についてあらためて考えるに至った。関連して、科学技術の教育を論じるセッションや、大学のあり方を論じるセッションがあったのは筆者には興味深く、学際的な研究の展開や留学生受け入れの問題は大きな話題になっていた。前者のセッションでは、経験豊かな先生方からの種々の問題提起を受けて、若手、中堅、ベテラン、さらに各国での異なる状況をふまえて非常に熱い議論が展開された。議論の時間自体が短いこともあり、白熱しすぎて必ずしもまとまりのある結論になったとは言えなかったが、各国、各立場での情報・経験を共有できたの

は価値あることであった。特に、分野を超える新しい領域の研究の活性化が国によらず大きな潮流になっており、また、そのための教育システムの設計が実は日本以外でも未だ大きな問題になっているという現実を知ることができたのは、大変貴重であった。

連日、昼食・夕食ともに貴重な交流の場であったが、特に2日目、3日目の夕食会は特筆すべきものであった。2日目は民間の宇宙輸送会社であるSpace X社の代表・Gwynne Shotwell氏が招かれ、人類に夢を与えるプレゼンテーションにより場内を興奮の渦に巻き込んだ。また、3日目は京都国立博物館を貸し切ったのおもてなしとなり、展示を楽しみつつ国際交流ができたのも貴重な体験であった。ちょうど館内を観覧中に、大隅先生のノーベル賞受賞の吉報が届くというサプライズもあり、話題には事欠かない食事会となった。

種々の興味深いイベントからなる会議であったが、筆者としては、特にConcurrent sessionの進め方に非常に強い興味を持った。各セッションに5～6台のテーブルが用意されており、参加者はどこかのテーブルに着席し、それぞれで問題提起を行って議論を進める。この時、代表者を議論の開始前に決め、その代表者が議論を記録しつつ、最後に内容をまとめて皆の前でスピーチするというものであった。私もまとめ役をやってみたが、人の議論を聞いて即時に的確にまとめ、ロジックのあるスピーチに短時間で仕上げる、というのはなかなかタフな作業であり、ある種の特殊技能と考えられる。しかし、時間が限られた会議を実りあるものにするには重要な能力と考えられる。一方で、このような素養に関する教育は、現在の日本では十分ではないものと思われる。今回のSTSフォーラムのような場で世界中からの代表者と伍して議論し、活躍できるような日本人を、私自身でも積極的に育てていく必要性をあらためて感じた。

以上で参加報告を終わるが、全体を通じ、これまでに参加したことのないタイプの会議であった点で非常に良い経験となった。このような貴重な機会を与えていただいた日本学術会議、及び、関係各位にこの場を借りて御礼申し上げます。この経験を今後の



Nobel賞受賞者（最前列）、尾身理事長（最前列右から5番目）とFuture leadersの集合写真

活動にいかしたいと思う一方で、この会議の独特のスタイルを理解した上でもう一度参加することができれば、より有効な機会にできるものとも考えている。

●プロフィール

岸村顕広（きしむら あきひろ）
九州大学大学院工学研究院准教授
専門：高分子化学、ナノ医療

第1回国際女性科学者会議 参加報告

平田佐智子

平成29年3月21日～23日にエジプト・アラブ共和国のカイロで開催された「第1回国際女性科学者会議（1st International Conference of Women in Science）」に日本学術会議の派遣により参加した。この会議は、女性科学者による最新の科学的知見の共有とネットワーキングを目的として、3日間の日程でカイロ市内のRamses Hilton HotelおよびAcademy of Scientific Research & Technologyで行われた。

本会議の参加者のほとんどは女性であり（スタッフも多数が女性であった）、通常の国際会議とはかなり異なる雰囲気であった。また、その多くがアフリカ圏を中心とした開発途上国の出身であり、科学そのものというよりも科学技術の応用に本質的な興味があるという印象を受けた。彼女らは、充実しているとは言えない環境下で科学研究を推し進めてきただけあり、個々人が非常に明るく、パワフルであった。

会議の内容は大きく分けて2種類あり、それぞれが自らの科学研究の知見を発表するセッションと、各国の女性研究者の現状や進学状況を報告するセッションがあった。また、Elsevierによる論文執筆支援セッションも行われ、多くの現地学生が熱心に聞き入っていた。

科学研究セッションでは、自国の洪水対策やインフラ整備、エネルギー資源の確保にどのように科学技術を応用するか、といったテクノロジー寄りの発表が多く、日本における「知識探究のための科学」というよりも、「生きるための科学応用」が必要な状況であるという印象を強く受けた。また、研

究状況について言及した発表者は、アメリカの大学院で情報学の学位を取得後、自国に戻り研究を継続しようとしたが、大学院で使用していたレベルの機器は手に入らず、やむなく別の研究を始めた、と語っていた。このように、せっかく留学して高い水準の研究能力を得ても、自国の環境が整っていないために十分な能力発揮ができないケースは、おそらく他にも多数あるのではないかと考えられる。



付帯行事であるナイル川クルーズでの1枚
(Photo by Dr. Kok-Keong Chong, Universiti Tunku Abdul Rahman)

また、女性科学研究者の現状を報告するセッションでは、女性研究者に対する社会的な偏見・差別が残る国も多く（日本も例外ではないかもしれない）、女性研究者を増やすための取り組みも紹介された。多数の女性参加者のヒジャブ姿や、各国の状況があまりに日本とかけ離れていることを知るにつれて、他の参加者との距離を感じていた。しかし、話してみると研究の悩みを共有できることを知り、同じ時を生きる「女性研究者」であることを実感した。通常なかなか会うことのできない国の研究者との対話は、日本の女性科学研究者の在り方を再考するきっかけとなった。

●プロフィール

平田佐智子（ひらた さちこ）
株式会社アイデアラボ研究員
専門：実験心理学・認知心理学

本誌11月号では、ジェンダーサミットの特集を予定しています。どうぞご期待ください。